未来予想図（みらいよそうず）

寝屋川市立梅が丘小学校　　２０２３・８・２５

校長室通信　　No. １７

保護者の皆様へ

大好きなあなたへ・・・

― 母から娘への一通の手紙 ―

ずっと以前のことになりますが・・・。寝屋川市内の、ある中学生の娘を持つ母親が、娘の毎日のだらしない生活をみかね、娘に一通の手紙を出しました。面と向かっての話では、けんかになってしまうので、自分の思いを精一杯込めて・・・。

暑かったね。お母さんは今日花粉がいっぱいで大変です。

ゆっくり話したいけど、きっと最後まで聞いてくれないと思い、手紙にします。途中で読むのをやめず、最後まで読んで下さいね。そのあとは、破って捨てても、あなたの好きにして下さい。

この前、お母さんが熱を出して寝込んだとき、いろいろ気を使ってくれる優しさには、正直びっくりしました。でも本当はうれしかったヨ、ありがとう。それと、もう一つうれしかったこと。それはあなたが、「保母さんになりたいな。」と言ってくれたこと。保母さんだからうれしかったんじゃなくて、将来の夢があるということ、なりたいものがあるということ、それがうれしかったんです。本当に大人になった時、保母さんをしているかもしれない。いや、違う職業についているかもしれない。でも、１３才の今、夢があるということ、それを話してくれたことがうれしかったんです。

でもね、そのためには今、何をするべきなのか、考えたことある？　ただ、中学校を卒業して、高校へ行って、そこまではできても、今のあなたにでは、その上が見えてきません。悲しいね。せっかく夢があるのに・・・。

今のあなたは楽しそうだけど、でも同じ『楽』だけど、お母さんから見れば、『らく』しているようにしか見えません。同じ漢字でも、大きな違いだよ。何がって？　一生懸命しているって・・・？　悪いけど見えません。テストの点数のことを言っている訳じゃない。

点数は結果だけれど、そこに至るまでの過程のことです。誰だって、一日や二日勉強して、点数がとれるなら、苦労しません。受験も悩むことありません。「あーあ、点数悪かった。」と終わってしまうことが一番怖いのです。大切なのは、「じゃ、次がんばろう！！」と思う気持ちと行動です。あーあ、次頑張ろう、というのでは、行動はついてきませんよ。テストのまちがったところを、もう一度解いてみましたか？　どこがまちがったのか、わかりましたか？　今、お母さんには、自分に新たな夢があるので、毎日勉強中です。でもそれは、まわりに見せるための勉強ではなく、本当に自分のためだけなのです。だから、まわりの人にわかってもらえなくても、自分で悔いのないようにしているだけです。お母さんがしている姿を見ればと思いましたが・・・。

家に帰って、制服のままテレビを見て寝る生活から変えてみませんか？　家に帰ったら服を着替え、気持ちの入れ替えをし、それからテレビを見るなら見てもいい。でも、一日３０分でも一時間でもいいから、勉強しませんか？　数学や英語はこつこつ学習しないと成果は出ないようです。やる前から無理と思っているだろうけど、今『楽』はしないこと！！　おしゃべりしたり、おしゃれをすることに文句は言いません。（でも、ポロシャツは中に入れ、化粧したり、髪を茶色にしないという前提ですが・・・）

でも、このままの生活をしていると、夢を持つ前に、夢が見れなくなるヨ。そのためにはまず、環境作りですね。今の部屋では感心しません。明日明日じゃなく、片付けようよ。そういうところから、一つ一つ変えていってみよう！！

これを読んでも、きっと「うっとおしいなあ」と思っているかもしれませんね。でも、怒ってやらせることも、力づくでやらせることもしたくはありません。だってもう、少女から女性になる、ひとりの「あなた」という、自分の意志を持った人に成長しているんだから・・・。お父さんとお母さんは、あなたが夢を持ち、実現するためなら、喜んで協力します。でも、それには本人の努力が必要なんですよ。これから先、夢は変わってもいい。どんどん変わってもいい。でも、それになるもならないも、本人の意志と努力だから・・・。

すてきな夢を持ち続け、一歩一歩頑張っていって下さいね。

―　母より　―

この手紙を読んだあと、娘の生活はすぐには良くなったわけではありませんが、少しずつ生活態度は変わり、自分の目標に向かって努力を続けました。そして、自分のカバンの中には、いつも、この母からの手紙を入れていたそうです。まるで宝物のように・・・。

その後、彼女は、幼いときからの夢であった保母さんの仕事に就くには至りませんでしたが、子どもたちと関わる仕事に就きたいという思いの中で、現在、小学校の教員として子どもたちに囲まれ、奮闘する毎日を送っています。

「思春期」そして「反抗期」の真っ只中にいる子どもたちかもしれませんが、大人が本当の愛情を持って接してやれば、それはきっと子どもたちの胸の中に入っていくことでしょう。たとえ不器用であっても、子どもを大切に思う心さえ持っていれば、そしてそれをなくさないようにさえすれば、それはいつか、彼ら彼女らに通じていくのではないかとも思います。それを信じながら、私たち教職員一同も、がんばっていきたいと思います・・・。